

# 序

セラピストのかすみさん（仮名）は、乳がんが全身に転移している状態であったが、少しでも仕事に参加することを希望した。すでに彼女にはセラピスト本来の仕事をする体力はなかったが、職場もそれを受け入れ、事務的な仕事を提供している。彼女はこのような言う。「仕事をしないで家にいると、気がめいってしまいます。仕事をする事で健康でいられるのです」

部分的な役割を担うことはもちろん、作業遂行の一部分を行うことであってもそれは作業参加であり、たとえ死を待つばかりの状態であっても、作業参加を支援できるのが作業療法士であるとの思いをもちつつ、本書、内部疾患編を編集した。

本書は基礎編、疾患編の2部で構成される。本書の基礎編では、内部疾患に共通し、応用性の高い事項について解説した。特に吸引は、理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の改正に伴い、必須となる教育内容である。

本書の疾患編では、具体的な作業療法プログラムの解説を重視したため、作業療法評価については、特殊なものを除いて表中に示すことにした。各評価の詳細については、本書同シリーズ「リハビリテーション基礎評価学」（羊土社、2014年）などの成書をご参照いただきたい。

また作業療法プログラムでは、活動と参加領域へのアプローチを最初に紹介した後、環境、心身機能と続けるようにした。身体障害に対する作業療法のなかには、理学療法とオーバーラップする部分が少なからずあり、作業療法の専門性が曖昧になりがちである。そこで、作業療法の1丁目1番地が生活行為、すなわち活動と参加にあるとの思いから、そのような順番にした。

さらに、アクティブラーニングを前提として、事例の概要とそれに対する質問を用意した。読者それぞれが、その学習レベルに応じて、臨床思考過程を鍛えるために活用していただきたい。

最後になりますが、本書の作成には、それぞれの執筆者はもちろん、彼らが担当したクライアントの皆さん、クライアントの家族、学生、同僚などの存在が必須のものでした。また、羊土社編集部の中川由香氏、原田 悠氏の力添えなしにはここにたどり着くことはなかったでしょう。これらすべての皆様に深く感謝いたします。そして、本書に関して何かのミスがあったとすれば、すべて編者の責任と考えていますので、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

2018年12月

小林隆司